

まちの話題

卓球大会で熱戦を繰り広げる

2月15日、冬場の体力づくりと交流を目的とした第3回養父市小学生卓球大会が養父体育館で開催され、86人が出場しました。同大会は学年別、男女別に分かれ、予選リーグと決勝トーナメントで順位を競うもので、養父中学校卓球部、養父市卓球協会、養父市体育指導委員の皆さんの協力をいただき実施しました。各選手は、応援にかけつけた保護者の声援を受けながら、日ごろの練習の成果を発揮して熱戦を繰り広げました。大会結果は次のとおりです。(各1位のみ掲載、敬称略) ▼6年

- 男子／藤原雄太(広谷小) ▼6年
- 女子／三木苑歌(広谷小) ▼5年
- 男子／津崎大輔(大屋小) ▼5年
- 女子／小野山藍子(浅野小) ▼4年
- 男子／藤岡尚良(大屋小) ▼4年
- 女子／山崎香澄(建屋小)

ハチ高原で雪山遭難救助訓練

2月23日、雪山で遭難した人を探し救助する訓練がハチ高原で行われ、兵庫県警、消防本部、氷ノ山鉢伏山岳遭難救助隊、鉢伏スキーパトロールの総勢60人が参加しました。



遭難者の搬送訓練をする参加者

この訓練は、雪中での捜索や救助の技術向上を図るために行われているもので、今年に入山者2人が雪崩に巻き込まれたことを想定。訓練参加者は、かんじきを履いて一列に並び、長さ3メートルのゾンデ棒と呼ばれる捜索用の道具を使いながら捜索訓練を行いました。その後、遭難者の搬送方法などについても訓練し、冬山の安心と安全のために技術の向上を図りました。



熱戦を繰り広げる子ども達

名ガイドで明延鉱山をご案内

第2回ひょうご観光ボランティア発表会が2月20日、神戸市の兵庫県民会館で開催され、明延鉱山ガイドクラブが「魅力あるツーリズム賞」と「奨励賞」の2つの賞に選ばれました。

この発表会は、ひょうごツーリズム協会が県下の観光ボランティアを対象に相互交流と活動ノウハウの向上のために開催しているもので、今回は14団体が参加。参加者は、得意の観光スポットを10分の制限時間内に案内し、日ごろの案内業務の腕を競い合いました。

養父市からは、明延鉱山ガイドクラブを代表して藤尾賢介会長が発表。審査員から「分かりやすく興味深い話だった」と評価されました。

藤尾さんは「明延鉱山のPRに少しでもつながれば嬉しい。これを励みにさらに頑張りたい」と話されていました。



明延鉱山ガイドクラブの藤尾賢介会長



地産地消に

取り組んでいます

食品加工グループ
「みずぎの里」の皆さん



関宮地域を拠点に活動する食品加工グループ「みずぎの里」(前田さよ子代表、6人は、平成17年11月に結成されて以来、養父市をはじめ但馬地域で収穫された農産物を使い、栃もちや青大豆みそなどさまざまな加工食品を作っています。

結成当初は、関宮温泉「万灯の湯」で商品を販売されていましたが、昨年同施設が休業した後も活動を続け、現在は道の駅よつか「但馬蔵」やフルーツの里やぶで加工食品を販売。また、道の駅よつかのお食事処では、同グループが作ったもちを使ったぜんざいが味わえます。

「はじめは地元の農産物を確保することが難しかった」と軌道にのるまでの苦労を話す前田さん。今では、「素朴な味わいでとてもおいしい」とお客さんからの評判も上々だそうです。

また、メンバーの皆さんは「今後も地域で余っている農産物を使って魅力ある加工食品を作り、それが新たな特産品として根づくように頑張りたい。この取り組みが農地の保全や野菜づくりをする高齢者の生きがいの一助になってくれれば」と今後の抱負と展望を語っています。

田中康子さんが 厚生労働大臣特別表彰 を受賞



田中康子さん(広谷)は、昭和61年12月に民生委員・児童委員に委嘱されて以来、7期21年にわたって同委員を務め、平成7年12月から退任された平成19年11月末までは、養父市養父民生委員児童委員協議会の女性部長を務められました。

特に、世帯数の多い広谷地区を担当されていたこともあり、子どもから高齢者までの幅広い年代層の身近な相談相手として活躍いただきました。

さらに、地域内の独居世帯への配食サービスなどのボランティア活動にも積極的に取り組まれるなど、地域福祉の向上にご尽力いただいています。

拝啓 市民の皆様

卒業式のシーズンとなりました。希望を胸に多くの若者が巣立っていきます。いつまでも養父市を忘れることなく志を遂げていた、だきたいと思えます。元氣な養父市づくりには、私たちの取り組みと同時に外部からの支援が大きな力となります。特に都市などの地域間交流は、人や物、情報、エネルギーを地域に与え活力を呼び戻します。昨年スタートした「ふるさと納税」は、地域の支援策として大変有効です。養父市においても「元氣な養父づくり応援寄附金制度」を定めて、「ふるさと納税」を募集しています。養父市は、養父市出身者の皆さんや養父市に縁のある方々が気軽に訪れたり、いつ帰ってこられても温かくお迎えできるように故郷であり続けなければなりません。2万8千人の養父市民は懸命に故郷を守っており、このためには引き続き、市と市民の皆さんが共に手を携えていくことが大切だと思っています。どうか市民の皆さんも「元氣な養父づくり応援寄附金制度」のPRなど、この取り組みにご理解とご協力をお願いします。

市長 広瀬 栄